

め、独自に考え抜き、ソクラテス的な「無知の知」という哲学的態度によって吟味し再体験している。そしてそこから生まれてくるものは、スコラ盛期の思想の如き、巨きな総合と統一ではない。むしろ彼に流入した様々の思想は、その圭角を鋭く磨きあげられて、互いにせめぎ合い傷つけ合っているように思われる。そして「人間的な神は推測的世界を自分自身から展開する」(大出論文 76 頁)。人間の思考は独立し、キリスト教と教会の枠を破って溢れ出ようとする。しかも彼自身は、*coincidentia oppositorum* という言葉の示す位置に踏み留まった。従ってその前を探ろうとする者にも、その後を学ぼうとするものにも、彼は興味ふかい研究対象である。彼は誰にとっても親しい、しかし実は理解し難い言葉を語るのである。

---

Alois M. Haas: *Geistliches Mittelalter*.

Freiburg (Schweiz), Universitätsverlag, 1984, 547 S.

小田川 方子

この書『宗教的中世』は、前号の『中世思想研究』(第27号)の「書評」で筆者が扱った『〈唯一なる一〉。ドイツ神秘主義の理論と言語についての研究』の編者の一人である Alois M. Haas によるものである。かれは 1934 年にチューリッヒに生まれ、中世研究、ドイツ文学、歴史学を修め、1969 年から 71 年までモントリオールの McGill 大学の教授、1971 年以来母校のチューリッヒ大学のドイツ文学の教授で、特にドイツ神秘主義の権威として著名である。この書はかれの最新の論文集であり、1980 年前後の論文を中心として全部で 26 篇より成る大部なものである。

まず序文で、著者は、中世キリスト教の充実と豊富に対するかれの感嘆を述べている。中世は宗教性で充たされており、それは疑いなく「豊かであると同時に深く、繊細であると同時に力強く、個性的実現において独創的で多様であるのと同時に、原則的なものにおいて一義的である」。この宗教性は確かに今日のわれわれにとって異質な面も

有するが、しかし特に神秘的なテキストの真剣さ、ないし「究極的立場」は、われわれの受容能力に対して親和力を有するとされる。序文の最後では、宗教的な意味での「究極的立場」が基調である神秘主義のテキストとの取り組みは、著者にとって常に「悦ばしき学」であったと、告白的に述べられている。

本文は六部より構成され、「人間と神」、「生と死」、「言葉と言語」、「神秘的経験」、「マイスター・エックハルト」、「実践的神秘主義の諸側面」というテーマでまとめられている。

「人間と神」の第一の論文は『Et descendit de caelo γυνῶθι σεαυτόν (Juvenal, *Satir.* XI, 27). ある神秘論的テーマの持続と変遷』と題され、著者が好んで追求する問題の一つ、自己認識が扱われている。Juvenal (60—140頃) はかれの風刺の中で、デルポイの箴言「汝自身を知れ」は「天から降下した」と述べているが、これは後に『ドイツ神学』の第9章で引用されている。その際、Juvenal がこの箴言に托した「汝の能力を測れ」という日常的な意味が、人間は自己自身へと戻り、「天上的なもの」を自己自身の内に発見でき、また発見せねばならぬという意味に変化している。Juvenal の引用は哲学的な意味ですでに Macrobius (400年頃) によって解釈され、Bernhard von Clairvaux, St. Thierry, Hugo ないし Richard von St. Viktor 等によって解釈が深化され、ドイツ神秘主義に受け継がれることになる。

これと密接な関係にあるのが、第三の論文『〈汝自身を知れ〉のキリスト教的諸視点。自己認識と神秘主義』である。ここではまず、「汝自身を知れ」というデルポイの神託が、知ある神と自らの無知を知る人間というソクラテスのモデルによって、更に新プラトン主義によって、豊かにされて、「キリスト教的ソクラテス主義」と名付けうる思惟構造を有するに至ることが指摘される。これにとって基礎的な地位を占めるのは、Augustinus による魂の自己認識およびそれと分かち難く結合している神の認識の説である。著者ハースは、自己自身を思惟する者がかれの認識、存在、意志を基礎づけつつ担う神の超越の中に非思惟的に関わり合っていることを、「汝自身を知れ」の神秘的構想と名付ける。Nosce teipsum はアウグスティヌスにおいてははじめから神と人間との人格的な関連の中にあり、in teipsum redi は transcende et teipsum と結びついているのである。

かかる基礎の上に、「汝自身を知れ」は、12世紀の Bernhard von Clairvaux, Ri-

chard von St. Viktor を経て、Meister Eckhart において最も先鋭化された形式をとる。これまでほとんど研究されていないある説教の解釈を通じて、著者はエックハルトの「魂の高貴性」(edelkeit der sele) とその中での「神の国」(daz reich gots) の発見とを明らかにする。

「人間と神」のテーマのもとには、以上の二篇の外に、『アウグスティヌスの精神における回心の構造へのスポット』、『教会の神秘——中世像の力について』が収められている。

第二の「生と死」のテーマのもとでの最初の論文は、『アンノ詩集における「第三世界」(dritte werilt) としての人間』であり、「アンノ詩集」(Annolied, 1080年頃成立)で描かれた人間像の典拠が Johannes Scotus Eriugena に求められ、両者の関係が追求されている。

このテーマには更に、中世ドイツ文学に関する諸論文、『Wolfram von Eschenbach の 'Parzival' における平信徒の敬虔』、『中世ドイツの歴史と精神生活とにおける十字軍の諸相』、『中世ドイツ文学における死の理解』、『Descensus ad Infernos, ダンテ以前の中世における地獄への道と彼岸像』が収められている。

第三のテーマ「言葉と言語」の最初の二つの短い論文『言語と事物』、『神秘主義者の言語』では、著者の言語観が簡潔に述べられている。かれは、言葉が常に、かつ必然的に、一般的なものを表現し、個々の事物そのものを表現しえないにもかかわらず、個物を名付けることを、「言葉と事物のパラドクス」と説明し、これを更に言葉自身のパラドクスと捉え、そこにおいて精神の受肉、つまり精神的なものと肉体的なものとの一体化が起るとする。キリスト教的神秘主義にとっては、人間となった神が「ことば」(WORT) であり、人間はこの最高のことばの一つの「形容語」(Beiwort) であるべきである。神秘的経験は、言葉で表明し得ずそれによって汲み尽くされないが故に、くり返し絶えず報告されなければならないのである。

これに続く論文『Meister Eckhart と言語、かれの著作の言語史的・言語神学的諸相』では、マイスター・エックハルトの言語の特徴が詳細に論じられている。人はエックハルトの「語法の奇跡」(Sprachwunder) について語るが、それは著者によれば、かれのテキストの「呼び掛けの構造」によるものであり、そこでは比喩的表現と抽象的言語のように対立する語り方がパラドクシカルに結びつけられており、並列や反定立、パ

ラドックス、誇張法、あらゆる対句法が駆使されていることが指摘される。エックハルトによって、神のことばとしての性格が強調され、神と人間との関係は、「言葉の出来事」(Wortereignis)として、語る神と、神の語りの中で他者 (alius) としてある人間との関係として捉えられる。ここからエックハルトにおいて中心的な役割を果たす「魂における神の誕生」も、言葉によって各々の今においてその都度新たに遂行されるところの、語る父と語られる子との人格的關係に対する証明として理解される。魂はこの事実を考察することにより、子と、従ってまた神性と、一つになることができるのである。

最後の二篇『マイスター・エックハルトとドイツ語』、『Tauler と Seuse における言語と神秘的経験』では、ドイツ神秘主義の言語的特徴が、思想史的連関の中で捉えられている。

次の「神秘的経験」のテーマでは、まず『神秘主義の時局性?』で神秘主義の現代的意義が探られるが、まだスケッチにとどまっている。次の『ドイツ神秘主義の理解における超越経験』では、エックハルト、タウラー、ゾイゼが、神秘的に人間に開示する神の恵みをそれぞれ存在論的、人間学的、心理学的カテゴリーで理解したこと、しかし三者共超越が常にすでに現在していることを固持したことが明らかにされる。

続く『イエス・キリスト——ドイツ神秘主義の精神内での救済と実現された超越』では、「我々の外なる」歴史的な受肉という事実が、「我々の内なる」出来事とならねばならぬことが述べられ、この両出来事の関係が13世紀のオランダとドイツの女性神秘主義者たちおよびエックハルトとその後継者たちの説の中に探られている。

「マイスター・エックハルト」は更に一つのテーマとして扱われ、そこでは、『マイスター・エックハルトの宗教的説教のプログラム』でかれの教えの出発点が示され、『時間と永遠についてのマイスター・エックハルトの理解』では、かれにおける時間の克服と永遠の構造について探求されている。

最後のテーマ「実践的神秘主義の諸側面」では、女性神秘主義者たちである Mechtild von Hackerborn, Beatrijs von Nazareth, Hadewijch, Marguerite Porete の教えが示され、更に『ドイツ神学』について、またスイスの修道士 Klaus における神秘主義と政治学について、および神秘的死について論じられている。

以上概観したように、本書はドイツ神秘主義を中心とする「宗教的中世」の特徴を、

哲学的・神学的・文学的・歴史的側面から多角的に、かつ影響史的連関において統一的に究明した力作である。著者がくり返し神秘主義の核心をなす根本問題に立ち還り、新たな視点から解釈を試みる姿勢には、かれの実存をかけた情熱が感ぜられる。文献は非常に多岐に亙り、かつ徹底的に熟考されている。しかし著者自身基本的にドイツ文学者であるので、原典は中高ドイツ語によるものが主である。したがって、ドイツ神秘主義をラテン語の文献を通じて、中世の神学や哲学との関連で捉えることは必ずしも十分に行われてはいない。これはわれわれに残された今後の課題であると思われる。

---

上智大学中世思想研究所編

『キリスト教的プラトン主義』

創文社，昭和60年，vi+296+9頁。

大 出 哲

本書の書評は不要である。なぜなら、この主題は、中世思想研究者の間で久しく渴望されていたものであり、すでに多くの人の座右の書となっているからである。また、本書の書評は不可能である。なぜなら、執筆者 P. ネメシギ、谷隆一郎、F. ペレス、熊田陽一郎、R. L. シロニス、大谷啓治、坂口ふみ、K. リーゼンフーバー、門脇佳吉、山下一道の諸氏は、力量において評者をはるかに凌ぐからであり、とりあげられる思想家は、オリゲネス、ニュッサのグレゴリオス、アウグスティヌス、偽ディオニュシオス・アレオパギテース、スコトゥス・エリウゲナ、コンシュのギヨーム、ボナヴェントゥラ、トマス・アクィナス、エックハルト、クザーヌスと、教父時代からルネサンス初期にまでわたり、評者の能力以上のものを要求するからである。にもかかわらず書かねばならない。O quam absurdum!

「キリスト教的思想家たちによってプラトン主義の精神はキリスト教信仰にふさわしい哲学的表現形態であるとみなされ、そのためキリスト教の哲学的・神学的解釈に(新)プラトン主義思想との融合からの影響が強く及ぼされるにいたった」(序言p. 2)。した